



…さまざまな文化活動を紹介するページ

「ミツバチの羽音～」から「幸せの経済学」へ

— 「シネマまえばし」再び登場 —

「シネマまえばし」は、このシリーズで昨年5月（No.4）に紹介しました。最近、この小さな映画館にちょっとしたブームが起こっていると聞いて、代表理事の小見純一さんに異例の再登場をお願いしました。聞き手は、「シネマまえばし」のサポーターを自認する鈴木みどりさん（フォーラム会員）と運営委員の瀧口典子。

『ミツバチの羽音と地球の回転』の反響

瀧口：3月11日の東日本大震災後に上映された『ミツバチの羽音と地球の回転』（鎌仲ひとみ監督のドキュメント、祝島の人々の暮らしと原発建設をめぐる動き、スウェーデンの人々の生活と自然エネルギーを美しい映像とともに紹介）が大ヒットしましたね。私も今までにない若い観客、ファミリーや子連れのおかあさんなどで席がいっぱいだったので驚きました。まず、この「ミツバチ現象」とも言っている反響についてどう思われますか？

小見：予期しなかったことですが、ちょうど東日本大震災の直後でした。みなさんの口コミのおかげで観客が増えました。その後、こんな映画入らないよなあという映画にも若い子たちが入り始めています。客席の後ろから見ていて感じたのは、何かが見つかったみたいですね。自分たちが今まで見てきたものはいったい何だったのか。押し付けられて、感動しろ感動しろと言われて感動してきたものが、実は自分達が求めていたものではないことに、気づき始めた若い人たちが増えてきたようです。

瀧口：どちらかというと中高年向けの「名画座」的な映画館だと思っていたのですが、こういうテーマ性のある映画は初めてですか？

小見：最初からやっていました。社会性のあるものをメッセージとして映画として伝えていこうと。もしかすると、講演会を100回聞くよりは、映画を一本見たほうが説得力があったりして。読めよ、分かれよって言うのも難しい。

鈴木：『ミツバチ～』でほんと、それ思いました。それで私、自分で手紙つけてチラシを知人・友人に届けてまわったんですよ。

いい映画は自分を投影できる

小見：映画って鏡みたいなもので、観ている人が自分の思いをスクリーンに投影するんですよ。それではじめて作品になっていくと僕は信じているのです。だからいっぱいの人で観ると、思いがたくさん鏡面に反射してそれをまた観るんですよ。100人いたら100分の1の空間でそれを見ているわけで、あとの99人分の思いとか感じ方みたいなものをこっちも背負っていく必要があるんです。今の映画は、「こう感動しなさい！」という映画ばかりで自分がなかなか反映できない。いい映画は自分を投影できる。『ミツバチ～』もそうだし、『ただいま』もそうですね。自分が同化できて、自分でも社会に対してなにかできるかもしれない、と感ずることで動き始めることができる映画です。

鈴木：『ただいま』よかった～。すてきな若者も登場するし…。そういう意味では『ミツバチ

～』も『ただいま』（99年：中・伊合作映画。近代化の進む北京郊外を舞台に、家族の和解、再生を温かい眼差しで描いた感動作）も、ちょっと光を見せてくれる映画ですよ。そこがみなさんの共感をよんだんでしょね。

小見：すきまがある。大上段に原発反対を訴えているわけでもないし、できることなら...と。できることをできない風に自分達はされていた。脱原発の問題もまず始めに「できっこないよ」から来ちゃってる。この豊かさをどうしたら原発無しで生きていけるか、ということに対して、みんな武装し始めていて、「できっこないよ、ここまで来ちゃったら」と。これはこわいですね。これは戦争前とまったく同じですね。

過去の歴史も知らずにこの豊かさの中で育った若い子達の立場に立って考えたら、「原発必要ないよ」って言えない現実があるから難しい。原発に対して自分も恩恵受けてきたわけだから責任がある、やっかいな自己矛盾を抱え込まざるをえない。だから見て見ぬふり、思考停止になる。僕は今の状況に対して危機感を感じています。風評以上に風化が一番こわい。今回の県知事選もあの投票率を見て愕然としました。

鈴木：一番危ないですよ。無関心というか、お任せになっちゃうとね。



これから何を？

瀧口：でもそういう状況の中だからこそ、これからの「シネマまえばし」が何を発信してくれるのか、期待しています。これからの企画や活動について話して下さい。

小見：「シネマまえばし」は今二年目です。馬鹿みたいにがむしゃらにやってきて、まだ赤字続きですが、とにかく三年やってみようと思っています。おかげで、『ミツバチ～』のように口コミで伝えて下さる方が増えてきましたから、手ごたえは感じています。

でも『ミツバチ～』がたくさん入ったと言っても3千人くらいかな。これはまだ前橋市民の1パーセント以下です。残りの99パーセントの人たちを掘り起していかないと、まだ少数派ですよ。だから、こういう映画館の役割はますます大きいと感じています。

今、みなさんに一番観てほしいのは、8月6日から始まる特集上映「日本風景～思い出は風に乗って」かな。全部で24本の傑作を集めました。自分たちの周りの、時代と共に失われていった家や駅舎や町並みや、家族の笑顔や子どもたちの歌う声や…。そんな懐かしい風景がぎゅっと詰まった映画をいっぱい集めました。『東京物語』『婚約三羽鳥』『カルメン故郷に帰る』『二十四の瞳』…。それぞれの人のなかで様々な価値観が揺らいでいます。でも、自分たちには帰る場所がある。泣いて帰っても許してくれる人がいる。そんな気づきができる映画ばかりを集めました。

暑い日が続きますが、映画館の中でたくさんの人たちと涼をシェアしながら、「にほんが一番良かったころ」を見つけて欲しいです。

それから、8月6日からの映画『ひろしま』の再上映。そして『二重被爆』というドキュメンタリー。この二本で、もう一度《核と原発を考える》きっかけにして欲しい。

そして『幸せの経済学』と『レイチェル・カーソンの感性の森』の二本で《ほんとうの幸せ》を考える契機にして頂けたらとも思います。

今の時代は、こんなに便利になったにもかかわらず、考える時間がなくなってしまいました。仕事に終われ、情報に追われ、ケータイに追われ…。映画館は、その時間の長さだけは、

考えていることを許される場所です。思考を止めておける仕掛けはいくらでもあります。でも今こそ、映画にきっかけを作ってもらいながら、宮澤賢治ではありませんが《ほんたうのしあわせ》を考えてみる時ではないでしょうか。

自分たちの、子どもたちの、子どもたちの子どもたちのために…。